楕円球の転がるままに

後藤 篤志（高48回）

２０２３年1月5日、高校の同期で当時ラグビー班（以下ラグ班と呼称）の主将を任されていた友人から1件のＬＩＮＥが入っていた。その内容はラグ班の1年先輩から飯田高校のＯＢ会のネットワーク作りをされているため、私の連絡先を知りたいとのこと。その先輩とＬＩＮＥでのやり取りをする中で、この『稲穂』の存在を知り寄稿させていただくことを決意した。その理由は先輩に頼まれて仕方なくという消極的なものではなく、高校を卒業してから四半世紀が経つ中で、自分自身の歩んできた道をほぼ振り返ってこなかったということに気付いたことが一番の要因だった。

楕円球との出会い

愛知県境にある実家から高校へ通学が出来なかった私は、祖母や姉とアパートを借りて高校に通っていた。飯田高校入学当初はそれなりに勉強が出来る方だと自惚れていたが、特に高校2年からの2年間は、飯田市内で就職した兄との2人暮らしの生活がスタートし、日常生活の家事も加わったことで部活と勉学の両立が難しくなり、高校の授業についていくのが必死だった。

ラグ班に入部したのは中学の先輩が入部されていたことと、高校から始める人が多いスポーツで、経験の差があまり出ないと思ったからだ。いざ入部すると練習はハードだったが、泥だらけ汗まみれになりながらボールを追いかけるのは性に合っていた。高校3年間の班活は日常の練習に力を入れていたというよりも、同期達と共に当時生徒会長をされていた個性的な先輩にプロデュースされ、学園祭やクラスマッチの一幕で観客の笑いを取ることに情熱を注いでいたことの方が思い出に残っている。

●ごとう・あつし
売木中出身。日本体育大学大学院博士前期課程修了。日本体育大学トレーニングセンター期限付助手を経て、２０１１年4月より神奈川大学経営学部の専任教員として奉職。現在に至る。

楕円球を通じた新たな人との交流

私は小さい頃からスポーツが好きで、中学の頃の卒業文集にもスポーツに関わる仕事がしたいと夢を語っていた。高校当時の学力と自分自身の得意なことで進学するなら体育系しかないという限定された選択肢の中で日本体育大学に入学することにした。

大学では、高校から始めたラグビーをもう少し続けたいという気持ちの反面、全国区の名だたる強豪校の選手が集まる体育会の運動部では、到底歯が立たないと自分の実力を客観的に判断していた。そんな中、大学のサークルに「タッチラグビー」というスポーツを見つけ、まずは体験を含め参加することにした。創部2年目ということもあり、部員は少なかったが、性別に関係なく実施でき、男女混合の試合もあるのが新鮮だった。また、ラグビー特有のコンタクトプレーはタッチラグビーには無かったため、私のような小柄な人間でもある程度通用すると感じ、このサークルを続けていくことに。

このタッチラグビーでは、対戦した大学生との交流や先輩後輩との交流はもちろんあったが、それよりも社会人のチームやプレイヤーの方々との交流が多かったのはとても良い経験となった。対戦チームの方々が集まる宴席では、社会人の方々の仕事の話を契機にアルバイトをお願いされたこともあった。年末年始には泊まり込みで正月用の餅を作り、真夏の炎天下には、早朝から店舗や一軒家の外壁塗装も手伝わせてもらった。体育大の学生で体力があり、粘り強く黙々と作業ができそうだという点を買ってもらったのだろう。一つのスポーツが縁となり貴重な経験と交流をさせていただいた。

また、このタッチラグビーを始めたことにより、海外への遠征や海外の選手やレフェリーと交流できたことも貴重な経験の一つだろう。大学2年次にはラグビー大国のオーストラリアから日本の国内の大会に招待されたチームと対戦。その年の夏にはハワイで開催された大会にも日体大のチームとして参加した。4年次にはシドニーで開催されたワールドカップに日本代表手として出場させていただいた。初戦前日のミーティングから緊張していたのを昨日のことのように思い出す。

初出場のシドニー大会を機に2003年の日本大会・2007年の南アフリカ大会・2011年のスコットランド大会と計4大会に出場することができた。それぞれの大会終了後に行われたアフターマッチファンクションで海外の選手やレフェリーとお互いのチームユニフォームやポロシャツを交換したのは、今でも大切な宝物と

なっている。また、片言の英語でのコミュニケーションではあったが、私自身のプレーに対して「あの試合の動きは良かった。お前にＭＩＰ（各試合で最も印象的な選手への投票）を入れたよ」と言われたことは、誇らしい出来事だった。

2011 年のスコットランド大会で対戦チームとノーサイド

目まぐるしく走り続けた大学院・講師生活

日体大での学生生活は、タッチラグビーにより充実してはいたものの、このまま卒業してもまだまだスポーツに関わるためには学びが足りない、これで良いのか?と自分自身へ問いかけ、もう少し勉強してみようと大学院を受験することにした。４年次はもともと授業が少なかったが、就職活動もせず頻繁に大学の図書館へ通い、運動生理学の本の内容をノートに書き写すなどの受験勉強をしたことを覚えている。

大学院で同じ研究室になった同期とは大学院での研究や実験などの記憶もあるが、仲の良いメンバーとは、スノーボードやビリヤードなどの遊びやそれぞれの自宅に寝泊まりしながら食事した記憶の方が断然に多い。お互いの結婚式では、新郎を交えながら日体大独自の応援「エッサッサ」をしたことも今では良い思い出だ。

大学院修了後は、大学のトレーニングセンターに所属する助手として3年間働きながら、週1回は他大学の授業を担当する非常勤講師をさせていただいた。3年間の任期を終えた後は、多くの大学で非常勤講師を勤めさせていただいた。多い時には1日で2つの大学で授業を掛け持ちさせていただくこともあったが、それも各大学の先生方がお持ちのネットワークで、仕事を探している私にお声かけ下さったおかげだ。特に非常勤講師を始めさせていただいた神奈川大学は、２０１１年度から専任教員として働かせていただいている。これもまた数奇な縁なのかもしれない。

巡り廻って楕円球へ

神奈川大学に入職してから今年で12年目になるが、勤め始めてからも多くの経験をさせていただいている。大

学の運動部に関わる仕事もその一つで、これまでに関わらせていただいたのは、女子サッカー部・バレーボールサークル・スキー部などと種目も様々である。女子サッカー部やスキー部では、私自身が経験していないインカレという舞台に立つ学生達のサポートをさせていただいた。サポートといっても部長や副部長という立場で、直接そのスポーツの技術指導をする役割ではなく、大学への提出書類の作成や確認、課外活動団体の会合や集まりへの出席などである。また、部内での問題が生じた時には、それを解決するために部員一人ひとりと面談をし、連日指導スタッフと夜遅くまで今後の運営について相談したこともあった。そんな役割でも一所懸命に目標に向かって汗を流している学生達を間近で応援させてもらい、共に泣き、共に喜びを分かち合えたのはとても有り難い経験だった。

全日本インカレで女子サッカー部の円陣の輪の中に

現在は２０２１年度から大学のラグビー部の部長を拝命している。色々な競技を経て高校の時始めた楕円球にまた関わることになるとは夢にも思っていなかった。これも何かの縁なのだろう。しかし現在ラグビー部を含め、多くの運動部はスポーツ推薦の枠が撤廃されてしまったため、今後の部の存続にも大きな懸念が生じている。運動部の存続には、部員確保のための推薦枠の復活も重要ではあるが、部活動やそのスポーツを実施することの意義や価値を高めていくことも同時に必要だと考えている。様々なスポーツに関わらせていただいたことで自分自身が成長できたことに感謝し、その恩返しをするためのご縁をいただいたのかもしれない。

末筆となるが、ご縁といえば、大学時代同じタッチラグビーのサークルに所属していた女性と8年間のお付き合いを経て、家族となったことも大きな縁といえるだろう。子宝にも恵まれ、団子3兄弟は今、野球に夢中だ。私はその子供たちと共に週末は白球を追いかける日々が続いている。公私ともにスポーツに明け暮れる毎日だが、これからも今までと同じく、楕円球のようにあらゆる方向に転がりながらスポーツへの恩返しの人生を歩んでいきたい。